

広島発祥 八朔（はっさく）の母樹を移植 (3/8~3/10)

広島生まれのかんきつ類の八朔は、広島県が全国第2位の出荷量となっています。

この度、八朔の栽培を支えてきた母樹(ぼじゅ:栽培拡大に必要な穂木の元となる樹木)を三原市(木原町)から東広島市(安芸津町)へ移植します。

移植前後の作業風景について、マスコミの方へ圃場を一部開放いたします。

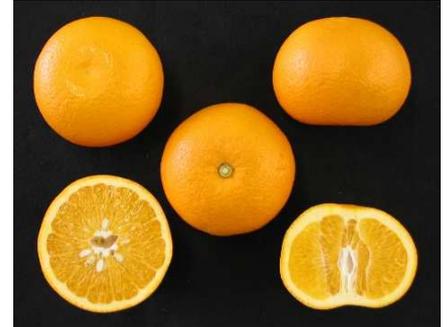


写真1 紅八朔の果実

【作業内容と日程】

- 日時 令和3年3月8日(月) 掘り上げ準備
場所 移植前:農業技術センター果樹研究部 三原圃場
(三原市木原町5丁目6-18)
- 日時 令和3年3月9日(火), 10日(水) 掘り上げ・運搬
場所 移植後:農業技術センター果樹研究部
(東広島市安芸津町三津2835)

【取材について】

- マスコミ等の取材対応は、原則受付時間を各日の10時とし、午前中のみとします。取材内容等によっては、別途相談のうえ対応します。
- 一般の方は、作業期間中は圃場内へ立ち入りはできません。



写真2 三原圃場の普通八朔の母樹

【農業技術センターの八朔の母樹について】

今が旬の八朔は、さわやかな甘みとほろ苦さが特徴のかんきつ類。生果の他、ゼリーや大福、ソフトクリームなどの加工品も人気です。尾道市の因島が八朔(普通八朔)、向島が紅八朔の発祥の地です。

実は、これら2種類の八朔は、順調に栽培が拡大したわけではありません。どちらもウイルス病に感染していたため、現地の樹から健全なものを見つけたり、無病樹を分離するなどの取組により、栽培面積の拡大が図られました。

この栽培拡大の取組の中で、特性や生育状況を調査したり、穂木を採取したりしていた母樹が、農業技術センターの三原圃場内にあります(写真2)。現在は母樹としての役割は終えていますが、これら普通八朔と紅八朔の母樹を、平成23年に閉所した三原圃場から東広島市安芸津町の圃場へ移植し、広島県のかんきつ産業を下支えしてきた母樹として維持・展示することとしました。

なお、今回の移植は、八朔の生産に力を注いでこられた広島県果樹研究同志会、穂木や苗木の供給、生産指導及び販売を担ってこられた広島県果実農業協同組合連合会の協力を得て実施いたします。

取材対応

取材窓口:広島県立総合技術研究所 農業技術センター果樹研究部(池田) 0846-45-1225